

夜遅くに職場を出た私は、いつものように歓楽街の端っこを通り抜けることにした。本当は遠回りして避けたいけれど、少しでも早く家に帰りたい。ここを通るのが一番の近道なのだ。

（今日はけっこう遅くなっちゃったな……。賑やかだ……）

ちらりと横目で華やかなネオンの方に目を向ける。すでにできあがったサラリーマン、やけに肌の露出が多い派手な男女、千鳥足で肩を組み合う若い集団。

きっちりとしたスーツを着て、シャツのボタンを一番上まで止めて、長い髪を一つに括つてゐる私とは、縁のない世界。

こういう場所に足を踏み入れることに、昔から漠然とした後ろめたさがある。厳しかった実家では、夜に散歩することすら許されなかった。その名残なのか、大人になった今でも、歓楽街の空気を吸うだけで少し肩身が狭くなる。

私は、中村日菜子（なかむらひなこ）。二十四歳で社会人二年目だ。職場と

家との往復の毎日。時々息が詰まりそうになりつつも、でも働くってこういうことだよ、と半ば自分を納得させながら毎日を過ごしている。

（わ、ちよつと混んでるな……。酔っ払ってる人も多いし急ごう）

トートバッグの持ち手をぎゅつと握り締めながら、なるべく人と目を合わせないようにして、俯いてスタスタと歩く。俯いていても、酒と煙草の匂いが混じり合った独特の喧騒が、纏わりつくように私の身体を包み込む。

見慣れた駅の明かりが遠くに見えてきた、そのとき。ちやうど歩いてきた人とぶつかってしまった。

「あつ。すみません」

「おっと！ お姉さんごめんね」

ぶつかった拍子に顔を上げると、明らかに柄の悪そうな男性がいた。

軽い調子で私に手を挙げた男性は、私の顔をじつと覗き込んだ。そして突

然、私の腕をぐいつと掴んだ。

「っ……………！」

（な、何……………!?）

距離を急に詰められて、身体が強張る。

「てかお姉さんめちゃうくちゃ可愛くない？ この後一緒に飲もうぜ」

「え！ あ、あの……………」

お酒臭い息がかかる。だいたい酔っ払っているんだろう。私の腕を掴む手の力は強くて、振りほどけない。

（ど、どうしよう……………）

こういうとき、軽くあしらってしまえるだけの強さが私にあつたらいいのに。どうやって断つたらいいのかわからない。

（ごめんなさいって謝る？ だけど、余計に機嫌を損ねちゃうかな。それと

も、はつきり拒否した方がいいのかな……!?)

ぎゅつと目を閉じて俯いたとき。

「——おい」

低く、だけどどこかよく通る声が、すぐそばで響いた。男性が、ひゅつと息を呑む。

「る、琉生さん!? どうしてここに!？」

焦ったような男性の声に、ぱつと顔をあげた。

その男の肩を後ろから掴んでいたのは、ずいぶんと背の高い男性だった。私にナンパしてきた男も背は低い方じゃなかったはずなのに、その人よりも頭一つ分くらい高い。

目を引いたのは、まず鮮やかな金色の髪。耳元では小さなピアスがいくつかが光り、胸元には華やかな金のネックレスが揺れている。着崩したシャツの上に

羽織った黒いジャケットは光沢があつて、ファッションに疎い私でも高級だとわかるようなそんな仕立てのものであった。

(わ……)

ドラマや漫画でしか見たことのないような迫力に、思わず息を呑む。こんな人が本当に実在するんだ、と場違いなことを考えた。

「仕事終わってこれから飲みに行くところだったんだよ。……それよりも。女の子、嫌がつてんだろ。そんなこともわかんねえのか？」

「……す、すいません！」

軽そうな口調なのに、有無を言わさない圧がある。彼が鋭い目をずっと細めると、ナンパしてきた男は慌てて私の腕を離れた。

(う……、手首痛い)

強く掴まれていたところが、じんじんと熱を持っている。気づかれないよう

に、そつと反対の手で腕をさすつた。

「馬鹿野郎。謝るのは俺に對してじゃねえだろ？」

金髪の男性がナンパしてきた男の胸を軽く小突くと、男はすっかり酔いも冷めた様子で私に向き直つた。

「すいません、お姉さん！ やりすぎました！」

そう言つて深く頭を下げるものだから、私の方が恐縮してしまう。

「い、いえ……。大丈夫、です」

男性はすっかりと小さくなつて、「はい、散つた散つた」と金髪の男性に言われるまま立ち去つていった。

——後に残されたのは、金髪の彼と、私だけ。

（う……。怖い）

背の高い男性に見下ろされるのは圧迫感があつた。しかも、こんな派手で私

とは一生関わりがなさそうなタイプの男性に。人と話すこと自体、昔から得意じゃないのに。

彼のおかげで助かったのは紛れもない事実のはずなのに、何よりも先に怖いと思ってしまうなんて、我ながら情けなかった。

（……でも、お礼はちゃんと言わなきゃ）

顔を見るのすらなんだか気後れして、膝の上でぎゅつと手を握りしめる。それでも、と小さく息を吸って、意を決して顔をあげた。

彼の、澄んだ茶色の瞳と視線がぶつかる。

「……っ」

値踏みするような視線ではなく、ただ真っ直ぐに、私だけを見ている。その真っ直ぐさがなんだか居心地悪くて、また目を逸らしたくなる。

（な、なんだろう。そんなに見ないでほしいんだけど……）

「……怖かったよな」

「え？」

言葉を返すより先に、彼は自分の着ていた高そうなブランドのジャケットを脱いだ。そして、私の背中に長い腕を回すと、一歩だけ距離を詰めて、ふわり、と肩にジャケットをかけてくれた。

夜の気配をまとった洗練された香水に、ほろ苦くて甘い煙草の匂いが混じっている。私にとっては非現実的な香りだった。それだけで、彼が私とは違う世界の人なんだと本能で理解してしまう。

「震えてたから。落ち着くまでそれ着てな」

（あ……）

そう言われてから、自分の肩が小刻みに震えていたことに初めて気づいた。なんて細かいところまで気にかけてくれるんだろう。外見だけで彼を怖がってし

まった自分が、少し恥ずかしくなった。

「あ、ありがとうございます。その、助けてくれたことも、ジャケットも……」

「いいよ、そんな大したことじゃねーから」

鋭さを孕んだ目元が、ふっと優しく細められる。形のいい薄い唇が弧を描いた。

（……笑顔は、すごく柔らかいんだな）

じっと見つめていると、その笑みはさらに深くなった。思わず見惚れてしまっていたことに気づいて、慌てて視線を逸らす。頬が熱い。

（それに、よくよく見ると、ものすごくかっこいい……）

金色の髪の間隙から覗く目元も、すっと通った鼻筋も、作り物みたいに整っている。ネオンの光に照らされたその顔は、この繁華街の雰囲気にあまりにも馴染んでいて、まるで一枚の絵のようだった。

その熱を誤魔化そうと、肩にかけられたジャケットの襟元をきゅつと引き寄せる。そのジャケットの袖は私の指先までをすっぽり覆い隠していて、裾は膝のあたりまで届いていた。

誤魔化すつもりが、かえって彼の身体の大さを思い知らされて、そのことにまた落ち着かない気持ちになってしまう。

「駅に向かう途中だったんだろ。あんたさえよければ送ろうか」

「えつと……？」

（どうして、私が駅に向かつてるってわかったんだろう）

一瞬、そんな疑問が胸をかすめる。けれど、こんなこと聞いて変に思われなかなとか、疑ってるみたいに聞こえないかなとか、そんなことばかり頭をよぎって、うまい言葉が見つからない。結局聞けないまま、その疑問はそつと胸の奥にしまった。

「……すぐ近くなので、大丈夫です」

「あー……、そっか」

彼は何かを考えるように一瞬視線をさまよわせた後、すぐに私に向き直った。

「あんた、名前は？ 俺は琉生（るい）」

「琉生、さん……」

今聞いたばかりの名前を、口の中でそつと繰り返してみる。琉生さんはどこか嬉しそうに目を細めて、それからにやりと笑った。

「琉生って呼び捨てにしてくれていいーのに」

「そつ、それはさすがに……」

「そう？ まあ、呼びやすいように呼んでよ。それより、あんたは？」

琉生さんは笑いを含んだ声で、肩の力を抜いたままゆったりと私の言葉を

待っている。

「……私は日菜子、と言います」

「日菜子ちゃんね」

琉生さんは繰り返すようにそう呼んで、満足そうに笑った。

（日菜子ちゃん、か。……男の人に名前と呼ばれるのなんて、いつぶりだろう）

だけど、この心臓の高鳴りは、単純に異性に名前を呼ばれたからというだけではない気がする。自分の名前のはずなのに、まるで特別なもののように響いた、その理由――。

（……なんでだろう）

私たちの間にほんの少しの沈黙が落ちたとき、琉生さんのスマホが震えた。琉生さんはちらりと一度だけ画面を確認すると、それ以上気にする様子もなくスマホをしまい直した。

「……あ、連絡大丈夫でしたか？ 私、もう行くので……」

「それは全然平気……、だけど。ほんとに一人で大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

「……そっか。酔っ払いには気をつけて帰れよ」

そう言いながらも、琉生さんはそこから動こうとしない。私が行くのを待っているのかもしれない。

（優しい人だなあ。……あ、そういえば、上着！）

「あの、琉生さん……！」

私が彼の上着に手をかけると、琉生さんは大きな手をひらりと振ってそれを止めた。

「上着は今度でいーよ。俺だいたいこのへんにいるから。帰り道で見かけたときにでも返しに来てよ」

「え、あ……。わかりました」

今度こそ、琉生さんに背を向けて歩き出す。コツコツと、ヒールを鳴らしながら、来た道を戻っていく。少し離れたところまで来て、ちらりと後ろを振り返った。

（――あ）

琉生さんは、まだそこにいた。目が合うと、大きく手を振ってくれる。手を振り返す勇氣はなくて、ぺこりと小さくお辞儀をして、また前を向く。

その帰り道、肩にかけたままのジャケットからは、夜の街の気配をまとった洗練された香水と、甘く苦い煙草の匂いがずつとしていた。



翌日、職場から出ると、空はどんよりと曇っていて今にも雨が降りそうだった。

まるでその天気は私の心を映しているようで、私は重たい足取りで繁華街の方へと歩いていく。

——ああいう賑やかな場所は、昔から苦手だった。

母は、昔から厳しい人だった。門限は夜七時。友人関係も細かく把握され、成績が落ちれば当然のように叱られた。それに逆らう発想すら、私にはなかった。だから私は、母の言う通り、「いい子」で居続けた。

就職を機に実家を出てからは、母から何かを言われることはなくなった。誰といて、何時に帰っても誰にも何も咎められない。それなのに私は、扉が開いているのにいつまでも鳥籠の中に留まっている鳥みたいに、外に出ることができないでいる。

(……お母さんが琉生さんを見たら、たぶん卒倒するだろうな)

金髪でピアスをたくさん開けた、いかにも派手な男性。母の基準からすれば、間違いない「関わってはいけない人種」だ。母が苦い顔をするのを想像して、こっそり苦笑してしまう。

そんなことを考えている間にも、賑やかで明るい通りに近づいていく。思わず、手に提げていた紙袋の持ち手をぎゅつと握り締めた。中で、琉生さんのジャケットがかきりと音を立てる。

(琉生さん、このへんにいつもいるって言ってたけど……。本当に会えるのかな)

あのかきは気が動転していて、そこまで思い至らなかったけれど、私は琉生さんの連絡先も何一つ知らなかった。ちゃんと聞いておけばよかった。我ながら、肝心なところで機転が利かない。

(……こんな高そうな服、返せなかったらどうしよう)

そんな不安を抱えながら、歓楽街へと足を進める。

昨日と違って、今日の歓楽街はまだどこか静かだった。時間がまだ早いせいか、あの独特の酒臭さも、それほど濃くはない。

(琉生さん、どこだろう)

いつもは下を向きながら足早に通り過ぎる歓楽街を、今日はちゃんと真っ直ぐ前を見ながら歩いていく。

ふと、賑やかな若い声が耳に飛び込んできた。ちらりと一瞬だけ目を向けると、鮮やかな金髪が目に入った。

(――あ)

私に気づいたのは、彼も同じらしかった。慣れた手つきで煙草の火を消すと、一緒にいた人たちに何か軽く言葉を返してから、こちらに向かって歩いて

くる。

「新しい女かー？」 「全然タイプ違うね？」 などという野次が飛ぶのを、琉生さんは振り返りもせずに「うるせーよ、お前らは黙つてろ」と笑いながらいらしていた。

（新しい、女……？）

普段の生活では聞き慣れない、あけすけな言葉に一瞬たじろぐ。同時に、ああ、見た目通りこういうやりとりが日常的にある人なんだ、と妙に納得している自分もいた。でも、それ以上考えを巡らせる暇はなかった。

「日菜子ちゃん！ 昨日ぶり」

人懐っこい笑顔とともに、琉生さんが路地の奥から出てきて、私のところまで歩いてくる。ネオンの光を背に受けて、その長身の影がふわりと私を覆う。昨日は同じように見下ろされて怖いと感じたのに、今日はそこまで怖いとは思

わなかった。

「琉生さん、すみません。お話中だったのに」

「いいよ、ちよつと引き止められて話してただけだから。……それより、昨日の。大丈夫だったか？ 痕とかついてない？」

琉生さんはそう言つて、するりと私の手を取った。

(……え!?)

あまりにも自然だったせいで、ろくに反応もできないまま、彼にされるがままになつてしまう。

指輪のはまつた節くれだった指が、私の手を包み込む。琉生さんの手と比べると、私の手は子どもみたいに小さい。触れたところから、彼の体温が伝わってくる。自分とは別世界の人だと思つていたのに、こんなにも普通に温かいことが、なんだか不思議だった。

心臓が早鐘を打つ。だけど、琉生さんの瞳は真剣で、本当に私を案じてくれているのだとわかった。だから、私は逃げ出したい気持ちを抑えて、じっとしていた。

スーツの袖口を少しだけまくられて、手首を確認される。指の腹でそつと肌をなぞられて、くすぐったいような感覚が走った。

「っ……」

ぴくつと肩を震わせた私に、琉生さんがふつと笑った。まるでその反応そのものを面白がるような、それでいてどこか優しい笑い方だった。

（は、恥ずかしい……。変な反応しちゃった）

「……とりあえず大丈夫そうか。痛んだりはしないんだよね？」

「だ、大丈夫です……！」

私がそう言うのと、琉生さんの手は離れていった。触れられていたところに、

まだ彼の温もりが残っている気がする。

それがなんだか落ち着かなくて、思わず視線を落とすと、本来の目的だった紙袋が目に入った。

（そもそもこれを返したかったのに）

手を取られた驚きで、すっかり忘れてしまっていた。

「……あの、琉生さん。昨日は上着ありがとうございました」

紙袋ごと差し出すと、琉生さんは一瞬目を丸くして、それからふと目を細めた。

「こんなに綺麗に持っていてくれたんだ。今着てもいい？」

「もちろんです。……今日は一枚あった方がいいですね。なんだか空気が湿っぽいです」

「なー、雨降ってきそう」

琉生さんが上着を羽織つてボタンを留めていると、何かに気づいたように、指の動きがぴたりと止まった。

「あれ、これ……」

彼は何も言わず、食い入るように私が直したボタンを見つめている。

「あ、余計かなとも思っただんですが……。もし私が引つ掛けてしまつてたら申し訳ないなと思つて、少しだけ直させてもらいました」

——そう。実は昨日の帰宅後、琉生さんから借りた上着を疊んでいるときに、ボタンが一箇所取れかかっているのに気づいたのだ。

人の上着に勝手に手を加えるのはためらわれたけれど、少し迷った末に縫い直しておいた。

私がそう言い終えても、琉生さんは何も言わなかった。話が得意ではない私相手にも気さくに話しかけてくれるし、さつきも歓楽街の人たちと気負いなく言

葉を交わしていた。そんな彼が、こんな風に黙り込むのは珍しい気がして、私は少し戸惑う。

（や、やっぱり余計なことしちゃった……？）

そんな不安が胸をよぎったとき、ぱつと琉生さんがこちらを向いた。

——その瞳に、射抜かれる。

（あ……）

いつも余裕そうな彼の目元が、ほんの一瞬だけ熱を持ったように潤んで見えた。何を考えているのか、うまく読み取れない。ただその瞳に見つめられているうちに、なぜか目が離せなくなる。

（琉生、さん……？）

でもそれも一瞬で、琉生さんはそれを誤魔化すように、こほん、と一つ咳払いをした。

「……日菜子ちゃん、縫い物上手なんだな。それ、俺が引つ掛けたやつだわ。気を遣わせて悪かったな。でも、正直めちやくちや助かった」

「……な、なら。よかつたです」

いつも通りの琉生さんに、なんだかほつとしてしまう。

（今の、なんだつたんだろう）

でも考えてみれば、ネオンの光の加減でそう見えただけかもしれない。深く考えるのはやめて、小さく首を振る。

「なあ、日菜子ちゃん。よかつたらお礼させてよ」

「え、お礼だなんて。元々は私を助けてくれたんですし——」

そう言いながら曖昧に笑ったとき。

——ザアアアアツ、と。

「わ!？」

突然の強い雨が、私と琉生さんを瞬く間に濡らしていく。

「すげえ雨だな。日菜子ちゃん、とりあえずこっち」

「は、はい……！」

琉生さんに言われるまま、近くのビルの軒下へと駆け込む。もうその頃には、髪も服もぐつしよりと重くなっていて、スーツの袖口からは雨水がぽたぽたと滴り落ちていた。

寒さにぶるり、と身体を震わせると、ふわりと琉生さんの上着が昨日と同じようにかけられた。

「せっかく綺麗にして返してくれたのになー。ちよつと着てて」

「あ、ありがとうございます……」

「この距離走っただけでもびしょ濡れだな。日菜子ちゃん、このままじゃ風邪引くよな」

周りの人たちも雨に慌てて駆け出したり、軒先に飛び込んだりと忙しく動いているはずなのに、ひどい雨音のせいか、琉生さんの低い声だけがやけにはつきりと耳に届いていた。

「うーん、俺の家、はさすがにまずいよな……」

琉生さんは考え込むように顎に手を当てて、独り言のように呟いた。それは私に向けた言葉ではなかったからか、雨音に紛れてほとんど聞き取れなかった。

「日菜子ちゃん、ちよつとだけ走れる？」

「え、あ、はい……！」

琉生さんが、私の手を取った。雨に濡れているせいで私の手は指先まで冷え切っていたけれど、彼の手は温かった。

ビルの軒先を飛び出して、私の手を引いて走る琉生さんの背中を、ただ夢中

で追いかける。

（胸が、ドキドキする）

それが走っているせいなのか、それとも別の何かなのか、私には判別がつかなかったけれど。ただひたすらに足を動かして、琉生さんの背中を追いつけた。

（こ、ここって……）

華やかなネオンを通り抜け、よくわからない大きなタッチパネルで琉生さんが部屋を選んでいた。言葉少なな彼に手を引かれるままエレベーターを上った先。彼に開けてもらった重たそうな扉を潜り抜けると、部屋の中央には大きなベッドがあった。

濡れたスーツが肌に張りついて、ひんやりと冷たい。それでも、今の私はその

ことよりも、生まれて初めて足を踏み入れた場所の物珍しさの方が気になって仕方なかった。

これまでの人生で入ったことはなかったけれど、ここがどこかはなんとなく知っている。

（ら、ラブホってこんな感じなんだ……）

あんまりきよろきよろするのも気が引けて、目だけを動かしてそつと部屋の様子を見回した。ベッドの上にはよくわからないたくさんボタンのついた操作盤のようなもの、ベッドサイドには真四角の小さな包みや、電源コードに繋がれて先が丸みを帯びた形の何か――。

「んー、ちよつと明るいか」

「……え？」

状況についていけず固まっている私をよそに、琉生さんは平然とそう言う

と、ベッドの上のよくわからないボタンを操作した。部屋の照明がふつと落ちて、薄暗くなる。

（わ……。な、慣れてる……）

確かに、ここまで来る道のりも迷いがなかったし、何度も来たことがあるんだろうということは容易に想像がついた。

こんな私にも優しくしてくれる人で、ずいぶんと話しやすいから忘れそうになるけれど、やっぱり彼と私が生きる日常はこんなにも違うんだなと実感する。

（……というか、そんな場所に今、琉生さんと二人きりでいるってこと？）

不可抗力とはいえ、あまりよくないのではないだろうか。でも、これは雨に濡れた服を乾かすためであって、それ以外に他意なんてあるわけがない。きつと、きつと、こんな状況に慣れていないから、変に意識してしまっているだけだ。

そう自分に言い聞かせているうちに、琉生さんが私の方に向き直った。

「日菜子ちゃん」

「は、はい……！」

緊張のあまり、声がひっくり返ってしまった。

（わ、恥ずかしい……）

「もしかして、緊張してる？ ……まあそりゃそうか、よく知らない男と二人きりだもんな」

「す、すみません……」

「謝らないでよ。昨日会ったばかりで、まだ二回目だもんな。警戒するのも当然だろ。だけど、風邪引いても困るから。ここで服乾かしていこう」

「わ、わかりました……。えつと」

どうするべきかわからず、とりあえずスーツのボタンに手をかけた。だけど、

冷え切った手はうまく動かなくて、ボタンがなかなか外せない。

「あ、あれ……」

「——手伝ってやろうか？」

低い声が、思ったよりずっと近くから降ってきた。ボタンに氣を取られていて、いつの間にこんなに距離を詰められていたのか、全く気づいていなかった。

「え、あ……」

「冷えたら、困るから」

自分に言い聞かせるように、琉生さんはぽつりと言った。

ボタンにかけたままの私の震える手を、琉生さんの大きな手がそっと包み込む。そのまま優しく下ろされると、代わりに彼の手が、スーツのボタンにかかった。

ジャケットの二つのボタンが、一つ、二つ、とゆつくり彼の大きな手で外されていく。時折、彼の髪の中から落ちた雨の雫が、屈み込んだ拍子に私の頬を伝った。

（……琉生さんは、親切で服を脱がせてくれてる。私が、冷えたら困るから）——そのはず。そのはずだ。

なのに、どうして。心臓が、うるさいくらいに音を立てている。

「脱がせるよ」

「あッ……」

ジャケットを脱がせるのに、彼が屈んだせいで、いつもより近くで彼の声が鼓膜を揺らした。それだけで、息を吸うタイミングを忘れてしまいそうになる。

（どうして……）

琉生さんが、私のシャツにじつとりと視線を注いでいる。その眼差しを追い

かけると、雨で透けた白いシャツに、ピンク色のブラジャーがくつきりと浮か
び上がってしまっていた。

「み、見ないでッ。ください……」

咄嗟に両腕で自分を抱くように胸元を隠すと、琉生さんがごくりと唾を呑む
音が聞こえた。

「あ……、悪い。軽々しく見ていいものじゃなかった。……あとはバスルーム
使つていいから。俺も着替える」

「わっ、わかりました……!!」

私は逃げるようにバスルームへと向かった。

さつきので体温が一気に上がったせいか、シャツのボタンは自分でちゃんと外

すことができた。

服を脱いで、自分の身体を拭いている間にも、さっきの琉生さんのとろりと濁った視線が脳裏に焼きついて離れなかった。

（どんな顔して戻ればいいんだろう……）

ただどいつまでもバスルームに籠ってるわけにもいなくて、私は覚悟を決めてバスローブを羽織って部屋へと戻った。

私がそろりと様子を窺うと、琉生さんはドライヤーで髪を乾かしているところだった。綺麗な金色の髪が、ドライヤーの風でふわふわと舞い上がっている。

彼は私の姿に気づくと、ドライヤーを止めて自身の膝の間をポンポンと叩いた。

「おーいで」

柔らかな笑顔で、努めて軽い調子で彼は言った。まるで、親が子どもに言うような言い方だ。さっきの熱っぽい視線は、今はひとまず鳴りを潜めているようだった。

「は、はい」

（髪を乾かしてくれるってことだよな）

さっきまでの雰囲気を出すと胸の奥がざわざわとしたけれど、彼のさっぱりした様子を見ると、こちらも意識しすぎないようにしようと思えてくる。

深い意味はない、ただ髪を乾かしてもらうだけ。そう自分に言い聞かせながら、なるべく気楽な足取りでベッドに上がった。

「それではお客様、髪を乾かしていきますね」

「ふふ、美容師さんですね。お願いします」

琉生さんがドライヤーの電源をつけた。自分の家のものよりずっと風量の強いドライヤーの熱が、私の髪をふわりと揺らす。

彼の大きな手が、私の髪の間を丁寧にすくい上げる。太い指先が、頭皮を繊細に、優しく撫でていく。

なるべく緊張しないようにしようと思っていたのに、すぐ背後に感じる彼の気配に、また体温が上がつていく。それでいて、不思議と嫌な感じはしなかった。

（緊張するけど、安心するような……。なんか、不思議な気持ち）

しばらくそんな時間が続いた後、パチン、と彼がドライヤーの電源を切る音がして、あとには空調の音だけが静かに部屋に満ちた。

琉生さんは、何も言い出さなかった。ただ静かに、大切なものに触れるように、私の髪を手櫛で優しく梳いていく。

肩にかかった髪を、そつと右側にまとめられる。わずかに彼の指先が首筋を撫でていつて、そこだけがじんと痺れた。

「ッ……」

（——なんで、私……）

私がびくりと身体を震わせると、一瞬、彼の手が止まった。

露わになった首筋に、ドライヤーの熱が抜けていくようで、心許ない感覚があった。剥き出しになった皮膚が、彼の視線にさらされている気がして、うなじのあたりがちりちりする。

後ろで、彼がすう、と大きく息を吸い込む気配がした。何かを抑えたような、そんな音だった。

（な、なに……？）

鼓動が耳の奥で鳴っている。ある種の予感めいたものを抱きつつ、だけど私

は少しも動けなかった。

そして次の瞬間、柔らかくて熱いものが、首筋に触れていた。

「……ッ!？」

思わず肩がびくり、と跳ねる。

（い、今のって……？）

「日菜子ちゃん」

私そのまま動けないでいるうちに、首筋に吐息を触れさせながら琉生さんが呼んだ。そして、今の唇の感触は気のせいではないと教えるみたいに、もう一度、首筋にちゅ、と唇が触れる。

「る、琉生さ……、あ……」

喉の奥からやつと声を絞り出すと、今度はふわりと後ろから抱きしめられてしまう。昨日も感じた香水と煙草の香りが、昨日よりずっと近くから漂ってくる。

る。

肩に、そしてお腹に、琉生さんの長い腕が回って、身動きを封じられる。バスローブ一枚を隔てただけの距離で、琉生さんの体温が伝わってくる。下着をつけていないことを、今さらのように思い出した。

「あー……、やべー。日菜子ちゃん超いい匂いする」

「ひゃ……ッ」

首筋に彼の顔が埋められて、大きく息を吸う音が聞こえる。自分の匂いを嗅がれているのだと思うと、恥ずかしくてたまらなかった。

「日菜子ちゃん……、ちゅ……」

耳朶に琉生さんの熱い吐息がかかったと思うと、そのまま耳に口付けられた。

「あう……♡」

（な、何これ……!? どうして……!）

あまりにも急な出来事に思考がついていかない。碌に頭も回らない中、時折耳朶や首筋、うなじに降ってくる優しい熱の感触だけがやけにはつきりと肌に伝わってきた。

——早く、離れないと。

そうわかつているはずなのに、なぜか身体の奥から広がる甘い痺れに捌め捕られたように動けない。

昨日、ナンパされて手首を掴まれたときに感じたような嫌悪感は一切なかった。ただど代わりに、身体の奥からむずむずと湧き上がってくるその感覚に、恥ずかしさでどうにかなりそうだった。

「耳、小さくて可愛い。舐めていい?」

「え……? あッ♡」

耳元で囁かれたかと思うと、私が返事をするよりも早く、琉生さんの舌が耳朶を下から上へと丁寧になぞり上げた。その舌の熱さと湿った感触に、甘ったるい変な声が漏れてしまう。

「あー……、今、身体びくッ♡　　ってしたなあ。日菜子ちゃん、もしかして耳弱い？」

「そッ、そんなの知らな……、あッ、ひうッ♡」

れ〜〜〜ッ♡　　れろッ♡　　れろお……♡

耳の裏側を這った舌が、そのまま耳の縁をぐるりと一周するように舐め上げていく。そのたびに鼓膜の奥へとぞわりとした痺れが走り抜け、私の背中を戦慄かせた。

「でもすごい可愛い反応してる。……ちゅるッ」

「あッ♡　　それ……ッ♡」

（耳の穴に舌入っちゃってる♡ 頭の中にくちゅくちゅ♡ つて音響いて……♡ お腹の奥、なんかむずむずする……♡）

琉生さんは反対の耳にも大きな指を這わせると、触れるか触れないかくらいの繊細な力加減で、さつき舌でそうしたみたいに耳の裏をこすこす♡ したり、縁をくるッ、くるッ♡ となぞったりしてくる。

「ひうッ♡ るいさ、あッ……!!♡ んんッ♡」

触れられた耳から、じんじん♡ とした疼きがお腹の奥へと溜まっていく。くすぐったくて恥ずかしくて逃げ出したいのに、逞しい腕に強く抱きすくめられて、身動きひとつ取れない。

「日菜子ちゃん、こっち向いて」

「あ……ッ」

甘い痺れで頭がふわふわとする中、促されるままゆつくりと彼の方を振り向

くと、すぐに顎を掬い上げられ、目の前に琉生さんの熱を帯びた瞳が迫った。

反射的にぎゅっと目を瞑ると、唇に柔らかくて熱いものが重なる。

「んむ……ッ♡」

（わ、私……♡ 琉生さんとキスしてる……♡）

どうしてキスなんて、とか、私たちそんな関係じゃない、とか。そんな理性が頭をもたげかかったけれど、彼の唇の熱く柔らかな感触に吞まれて、思考が霧散していく。

緊張で固く引き結んだ唇を、琉生さんの舌先がトン♡ トン♡ とノックするように優しく突いた。その舌の生々しい感触に驚いて、ほんの少しだけ口を開けてしまうと、琉生さんの舌がそこを逃さず滑り込んできた。半ば強引に私の唇を押し開けて、口内を蹂躪していく。

「んあ……ッ♡ ん、ふうッ♡」

開いた唇の隙間から、自分のものとは思えない甘ったるい声が鼻から抜けてしまふ。聞かれたくないのに、彼の口づけがそれを許してくれない。

琉生さんの熱い舌が私の頼りない舌を捕まえ、逃がさないように深く絡め取る。

唾液が絡み合う、くちゅ……ッ♡ という水音が耳元で響くたびに、身体の芯がとろけていくようだった。

(キス……、気持ちいい……♡ 頭ふわふわって、溶けちゃいそう……♡)

すっかりキスの熱に夢中になっていると、背中から脇腹へと回されていた琉生さんの大きな手が、じわじわと上へ這い上がってくるのがわかった。あ、と思つたときにはもう遅かった。

——もにゅ……♡

「ひゃ、あッ♡ そッ、そこは……♡」

琉生さんの大きな手が私の乳房を下から包み込むようにして、もにゅ、もにゅ……ッ♡ と優しく揉みしだく。

「……はッ。日菜子ちゃんのおっぱい、柔らかくて気持ちいい……♡」

「んんッ♡ ……るッ、琉生さん！ こ、これはさすがに……ッ、……んうッ♡」

「ダメ？ 俺は日菜子ちゃんの可愛い声、もつと聞きたい。……大丈夫、痛いことはしないから。少しだけ、俺に任せて？」

「……ッ！♡」

耳元で囁かれるストレートな言葉に、背筋が甘く戦慄いた。

あまりにも自然なその態度に、頭の整理が追いつかない。だけど、身体が感じてしまう甘い刺激だけは紛れもない事実で、戸惑いも、羞恥心も、私の中にあつたはずのためらいも、ぜんぶ琉生さんの温かい手のひらに溶かされ、呑み込まれていく。

(うう……、こんなダメなのに……♡ 気持ちよくて、何も考えられなくなる……♡)

何か言葉を返さなきゃ、そう思うのに、口からはくぐもった吐息が漏れるだけで、まともな言葉にならない。

琉生さんは私のこめかみに小さくキスを落として、それから目の奥をじいつと覗き込んだ。

「目え、とろんってして可愛い……。もつと気持ちよくさせるから。日菜子ちゃんの好きなところ、教えて？」

「そッ、そんなのわかんない……ッ♡ あッ♡」

甘く囁かれるたびに、まだ残っていたはずの理性まで溶かされていくようで、まともに考えることすらできなくなる。話している間にも、胸を下から包んでいた彼の指先が、乳首へと伸びていく。

「あんまり自分じゃしねえの？ 彼氏とかは？」

「ん……ッ♡ 自分じゃ、しないし……。彼氏は——、んむうッ!?♡」

「ぢゆるッ♡ ちゅ♡ ……ごめん、やつぱ聞きたくないから今のなし」

これまでに二、三人とお付き合ひしたことはあつた。

けれど、いつも相手に流されるまま付き合つて、だけどすぐに面白くないと振られるのがお決まりだったのだ。

（こんなにキスが気持ちいいと思つたの、琉生さんだけで——）

伝えたいのに、言いかけた言葉は琉生さんの甘いキスにかき消されてしまう。

「あ、ちなみに俺は今特定の相手いないから。心配しなくていいよ」

（特定の、相手……）

ならば、特定ではない相手だったらいるのだろうか。その言葉に、胸の奥がチクンと痛むような気がしたけれど、気のせいだと自分に言い聞かせる。

というよりも、乳首の周りをくる♡ くる♡ と這い回る彼の指の感触に意識を奪われて、それ以上は何も考えられなかったただけだけど。

「おー……♡ 可愛い乳首、勃ってきたな。服の上からでもどこにあるか丸わかり」

——カリッ♡

「んあッ!?♡」

両手の爪先で、小さく尖った先端を軽く引つ搔かれる。さっきまでのぞわぞわした焦ったさとは違う、電流のような鋭い快楽が背筋を駆け抜けた。

「あ、ビクッ♡ つてなった。感じやすい身体なんだ、可愛い」

（そ……ッ、そんなこと、ないと思うんだけど……♡ でも、なんか琉生さんに触られてと……♡ 全然違う……ッ♡）

カリカリッ♡ カリカリッ♡ カリカリ……ッ♡

「ああッ♡ カリカリつてするのッ、やだ、あッ♡ あ♡ あッ♡」

「やだって言うけど……。腰すげー揺れてるし、気持ちよさそうなエロい声だつて出てるよ？」

慌てて唇を噛んで声を殺そうとするけれど、次の瞬間にはもう、噛んだ唇の隙間から甘い声が漏れていた。

「……………ッ♡ ……あッ♡ んん……………ッ！♡」

琉生さんは、一定のリズムを保ったまま、布越しにぷっくり♡ と主張する乳首をカリカリ♡ といじめ続ける。

「だ、だつて……………♡ ん♡♡ こんな、のお♡」

「——気持ちいい？」

「んあッ！♡」

不意に頂の中心をきゅッ♡ と押し潰されて、濁った嬌声が溢れる。そのまま

ま上下にすりすりッ♡ と擦り上げられて、下腹の奥が勝手にひくひくッ♡ と震えてしまう。

「ん、んう……♡ う……♡」

(き、きもちいい、けど……ッ♡)

さっきからずっと、お腹の奥にどろりとした甘い熱が渦巻いている。じくじく♡ と切なく疼いて、私は耐えられなくて思わず膝を擦り合わせてしまった。

その拍子に、太ももの隙間からにちゅり♡ と湿った水音が零れる。聞かれてしまったかもしれない、そう思うと余計に体温が上がって、蜜口からまたとり♡ と熱い蜜が溢れ出してしまった。

(恥ずかしいのに……♡ なんか……ッ、むずむずする……♡ もっと、ほしい……♡)

快感に浮かされて、まともな思考ができなくなる。頭の中が、ひたすらに淫らな欲望だけでいっぱいになっていく。

「もつと欲しそう。えっちで可愛いなー……♡」

「そッ、そんなこと……ッ♡」

「気持ちよくなってくれて、俺は嬉しいけどな。……ほら、脱がすよ」

琉生さんは私のこめかみに一つキスを落とすと、器用な手つきでバスローブの紐を解いていく。

「あ……♡」

そのまま前を寛げられて、ひんやりとした空気が地肌を撫でていった。

琉生さんが、確かめるように肩越しに顔を寄せてくる。ぴたりと背中彼の体温が重なって、耳元で、興奮を隠しきれないような熱い吐息がかかった。

「やべー……、超綺麗」

掠れた声が耳朶を打つのと同時に、琉生さんの手が再び私の胸へと伸びていく。また下から形を確かめるように、やわやわ♡と揉みしだかれる。触れられたところが、熱い。

「んッ♡ あ、んう……ッ♡」

さつき服越しでも同じことをされていたはずなのに、琉生さんの大きな手によつて、私の柔らかなおっぱいがもにゅ♡ もにゅ♡ と形を変えていく。自分のものとは思えないその光景から目が離せなくて、恥ずかしいはずなのに、なぜか目の奥がじわりと熱くなる。

彼の指先が乳首へと這い上がってきて、乳輪の周りをくる♡ くる♡ と撫でていく。焦らされるように、乳首がぐぐッ♡ と上向きに主張していく。まるで、早く触って♡ とおねだりしてるみたいに。

「可愛い……♡ ほら、カリカリつてしような」

——カリカリッ♡ カリカリカリッ♡

「んんッ!!♡ あ、んう……ッ♡ あ♡ あ……ッ♡」

待ち望んでいた刺激に背筋がビリビリッ♡ と痺れて、腰がそり返る。そのせいで、琉生さんの指先に胸を押し付けるような形になってしまう。

(あ♡ あ♡ 直接触られるのッ、すごい……♡ 頭、じんじんッ♡ って痺れる……ッ♡ カリカリ♡ きもちい……ッ♡)

琉生さんは片手で乳首を弄びながら、快感に耐えかねて擦り合わせていた膝を割ると、右手を太ももの内側へと滑らせた。

「あ……ッ♡」

——にちゅッ♡

琉生さんの熱い手はするするッ♡ と私の秘部へ伸びていって、蜜壺から溢れた愛液を確かめるように、下から上になぞりあげた。

彼は、愛液でたつぷりと濡れぼそったその指を私の眼前に持ってきて、親指と人差し指でぬるぬる♡ と擦り合わせて広げた。愛液がとろお……ッ♡ と糸を引いて、ぷちん♡ と離れる。

「すっげ……♡」

「や、あ……ッ♡」

（わ、わたし……ッ♡ こんなに濡れて……!?♡）

自分がどれだけ気持ちよくなってるしまってるのか知らしめられるようで、一気に顔が熱くなる。羞恥心でいっぱいのはずなのに、それとは裏腹に甘くひくついた下腹部がきゅッ♡ と締まるたび、また新しい蜜が溢れてくる。

「いいじゃん♡ 可愛い」

「あう……♡」

恥ずかしいからやめて、とそう思うのに、彼の掠れた声で「可愛い」と囁か

れると、それだけで身体から力が抜けてしまう。だから私は、彼がじつとりと蜜壺の周りに指を這わせる光景から、目を逸らすこともできずにいた。

すると、ずつと蜜口の周りを撫でていた彼の指が、すすす……ッ♡ と上つてきて、クリトリスを軽く弾いた。

——ピン……ッ♡

「あッ♡」

胸に与えられていた快感とは質の違う、鋭い痺れが背筋を駆け抜けて、腰がビクッ♡ と跳ねる。

「クリ、すげえ勃起してる。触ってつておねだりしてるみたいで可愛いなー♡」

「あ……ッ♡ んぐ、う……ッ♡ んん……ッ♡」

低く甘やかな声で、恥ずかしいことを囁かれる。認めるのも恥ずかしかったし、単純にクリトリスに与えられる腰が浮くような快楽に余裕がなくなつて、

濁った喘ぎ声を漏らすだけになってしまう。

「かわいいー……♡　ちゅ……」

だけど琉生さんはそんな余裕のない私の姿を楽しむように、時折いたずらにこめかみや耳に口付けながら、秘豆をいじめ続ける。何度も「可愛い」と繰り返されるたびに、身体だけでなく、頭の中まで甘く蕩けていくようだった。

「あ、んう……ッ!!　あ、ああ……♡」

「皮はそんなに剥けてない？　ちっちゃくて可愛いクリだなあ♡」

琉生さんは親指と人差し指でクリトリスを左右に挟むと、そのまま上下ににゅこ♡　にゅこ♡　と動かした。

「お、ん……ッ♡　そこ……、あッ♡　ぐうッ♡　そんなに、しちゃ、あ……、
ああッ♡」

「あー……、日菜子ちゃんの可愛いクリトリス、ズル剥けにしてもっと可愛が

りてえなー……♡」

「……♡ッ!?♡ んん……♡ッ♡」

にゅこにゅこ♡ にゅっこ♡ にゅつこ……♡ッ♡

だんだんと、摘む指先に熱がこもっていくのがわかる。上下に激しく擦られるたび、背後から抱き寄せる腕にもぎゅつと力がこもって、彼の乱れた呼吸が耳にじかに響いた。

痛いわけじゃないのに、強すぎる快感に腰が逃げようとする。だけど彼の腕がそれを許さなくて、じいん♡♡ と痺れる感覚だけが、その場に縫い留められていく。

琉生さんがにゅっこ♡ にゅつこ♡ と秘豆を擦っていくたびに、そこがぷつくり♡ と熱を持って腫れぼったくなっていくのがわかる。下腹がぎゅう♡♡ と重たくひくつく。

にゅっこ♡ にゅっこ♡ ごしごし……ッ♡ ごしごし……ッ♡

「あッ♡ しよれッ♡ そんな、したら、あッ♡ キチャウッ♡ なんかくる……ッ♡」

「……いいよ、いつちやつて。日菜子ちゃんがいくところ、俺に見せて」

「あゝ……ッ♡」

尿意にも似た何かが込み上げてきて、腰がガク♡ ガク♡ と震える。何かに縋りつきたくて、私を抱きすくめている、もう片方の彼の腕にぎゅっとしがみつく。

しがみついた腕に応えるように、彼の腕にもさらに力がこもる。汗ばんだ肌の熱さと、荒くなつた吐息が、いつそう生々しく伝わってきた。そして――。

「んんッ!!♡ ——……ッ!!♡」

声にならない嬌声をあげながら、ビクンッ♡ ビクンッ♡ と身体を大きく

痙攣させる。つま先までピンッ♡と張りつめて、しがみついていた腕に爪が食い込むのもわからないくらい、頭の中が真っ白になった。

「はッ♡ は、あー……ッ♡ はあ……ッ♡」

（イ、イカされちゃった……♡ こんな、初めて……♡）
身体の奥から突き上げてくるような、こんなに重たくて深い快感はこれまで知らなかった。

「あー……、可愛すぎる」

肩で息をしながら乱れた呼吸を整えていると、もう一度、私を抱きしめる腕に力が込められた。

そのまま、先ほどまで私のクリトリスを扱っていた彼の指先が、絶頂の余韻でひくついているおまんこへと、ゆっくり滑り降りていく。

「ひうッ♡」

「おまんこ、さつきよりもぐちよぐちよだな？♡」

「やッ♡ 言わないで、って……♡ ……あ——ッ!!♡」

——ぬぷッ♡

（琉生さんの指ッ、太い……ッ♡）

彼の太い指が、ナカへと侵入してくる。ぬぷ……ッ♡ ぬぷ……ッ♡ と膣襞押し広げるように、ゆっくり、深く入ってくるその感触に、身体がびくびくッ♡ と震えた。

ナカは彼の指を歓迎するように、きゅうきゅう♡ と締めつけて、指を離そうとしない。

「日菜子ちゃんのナカ、すつげえあつたかくてふわふわ……♡」

「や、あ……ッ♡」

琉生さんは湿った吐息とともに、独り言のように呟いた。

自分のナカがどれだけ濡れて熱くなっているかを言葉にされて、ナカがまたきゅうッ♡と甘く震えた。

「俺の指、すっごい締め付けてきて、可愛いなー……♡」

「あ……ッ♡」

もう何回目かもわからない『可愛い』は何度言われても慣れなくて、そう言われるたびに胸の奥にじいん♡と甘い熱が灯る。

だけど、そんな熱にのぼせている暇なんて与えられないまま、琉生さんの指が膣内をぐっちゅ♡ぐっちゅ♡と掻き回し始める。

「…………ッ!!♡ あ…………ッ!?♡ る、いさ、あ…………ッ♡ ぐんッ♡ しょッ♡ しょこ、おッ♡ なんかッ♡ へんになりゆ…………ッ♡」

「…………こーこ♡ 日菜子ちゃんの弱いところだな…………♡ ここトントンッ♡ つてするとすげえ締まる」

「んあぁ……ッ♡」

琉生さんの指は、私の弱いところをすぐに探り当てて、お腹側にある、そこだけ少しざらざらとしたところを、指先を折り曲げるようにしてくいッ♡と押し上げてくる。

下腹から這い上がってくる得体の知れない熱に、息が浅く途切れがちになる。吸っても吸っても足りないみたいに、喉の奥が小さくひゅつと鳴った。

——カリッ♡ カリカリッ♡

「んおッ!?!♡」

膣内を掻き回すその指に氣を取られていたら、急におっぱいをカリカリッ♡と引っ掻かれて、予想していなかった刺激に全身がビクンッ♡と跳ねた。

「あ♡ ああッ♡ るッ、るいさ……ッ♡ りようほ……ッ、おぅ……ッ

♡♡
」

ぐちゅぐちゅぐちゅッ♡　ぐちゅぐちゅぐちゅッ♡

カリカリッ♡　カリカリカリッ♡

ただでさえ限界に近いのに、上と下から与えられる快感に挟み撃ちにされて、頭の中で火花がばちばちッ♡と弾ける。

（あ♡　これほんとにだめなやつ……ッ♡　さっきのよりすごいのくる♡　ク
る……ッ♡）

「……日菜子ちゃん、——イッて♡」

（——あ♡♡）

脳に直接響くような、琉生さんの低く甘い声が鼓膜を揺らす。それと同時に、限界まで勃起して硬くなったクリトリスをぐりいッ♡と押し潰されると、もうダメだった。

「~~~~~……ッ!!♡♡……お、おッ♡♡」

ビクンビクンッ♡♡ ビク……ッ♡♡ ビク……ッ♡♡

一瞬の浮遊感の後、さらに深い絶頂の底に叩き落とされていく。琉生さんの腕の中で、足の爪先までピンッ♡♡ と伸ばして、全身をガクガクッ♡♡ と震わせた。

「……はッ♡♡ は、あー……ッ♡♡ ん、はあ……♡♡」

私が絶頂の余韻で荒い呼吸を繰り返していると、琉生さんの太い指が秘部からゆつくりと引き抜かれた。

「あ……♡♡」

ぽっかりと取り残されたような寂しさが襲い、おまんこが名残惜しそうにひくひく♡♡ と震える。堰き止められていた蜜が、太ももの内側を伝ってとろお……ッ♡♡ と零れ落ちていった。

「……ちゅ。日菜子ちゃん、可愛い」

「ん……♡」

こめかみに触れるだけのキスが落とされて、後ろから抱きしめる腕に力が込められる。

（疏生さんの体温……。あつたかくて、気持ちいい）

このまま時間が止まればいいのに、なんてそんなことを思ってしまう。

——ブブツ、ブブツ。

「わっ」

そのとき、テーブルの上でスマホが震える。

琉生さんは一瞬眉を寄せて画面に目をやったけれど、無視するように私の髪にもう一度唇を寄せた。

けれど振動は止まらない。何度も鳴り続けるそれに、彼はとうとう根負けし

たように小さく息を吐いて、身体を離した。

「……悪い、ちよつと出るわ」

「は、はい」

離れていった体温を寂しいと感じている自分に気づいて、誤魔化すようには
だけのバスローブの紐を結び直す。

琉生さんは頭を掻きながらテーブルまで歩いていき、スマホを取り上げた。

「——どうした？ ……ああ、それ明日でもいいけるだろ。……あ？ ……いや、
わかった、帰ったらすぐやる」

琉生さんはそう言つて電話を切ると、眉根を下げて私に向き直った。

「日菜子ちゃん、ごめんな。もつと一緒にいたかったんだけど」

「い、いえつ。気にしないでください」

琉生さんは名残惜しそうに私の頭を一撫ですると、浴室の方へ向かい、乾か

していた私の服を取ってきてくれる。

「はい、服どうぞ。……外まだ雨降ってつかない。この近くにコンビニあるんだよ。まだ降ってたら、そこで傘買ってこうぜ」

「……そうなんです、そうしましょうか」

さっきまでの甘い雰囲気なんてまるでなかったみたいに、琉生さんは普通に話しかけてくる。私はあんなに恥ずかしい姿を見せてしまった後なので、彼の目すらまともに見られないのに。

（……照れてるとか、そういうことじゃないんだろうな。琉生さんにとっては、多分——大したことじゃないんだ）

そう思うと、胸の奥に、小さな棘が刺さったような感じがした。

その後、外に出ると、雨はすっかり止んでいた。夜風はまだ少し湿っていて、さつきまでの熱を冷ますようにひんやりと頬を撫でる。

家まで送ると琉生さんは言ってくれたけど、さすがに申し訳なくて、駅まで送ってもらうことにした。

隣を歩く彼の横顔を、私はこっそり盗み見る。さつきまであんなに近くにいたのに、今はちゃんと距離を保って歩いていて、それが少し寂しいような、ほつとするような、変な感じがした。

彼は今日も、私の姿が見えなくなるまでずっと見送っていてくれて。振り返った瞬間、口の形だけで「ま・た・ね」と言った。

その一言が、次に会える約束みたいに思えて、私は改札を抜ける前に、もう一度だけ見送ってくれている彼の姿を確かめた。



それから、二週間ほどが経っていた。

「中村さーん、今日も彼氏来てるよー!」

日もすっかり暮れて、もう少して退勤しようとする残りの仕事を片付けていると、同僚の声が飛んできた。

私が答えるより先に、近くにいた二、三人が窓際に集まって、外を覗き込みながら口々に言い出す。

「わ、ほんとだ。ポルシェかつこいゝ!」

「いーなー、私もポルシェで迎えに来てくれる彼氏欲しいゝ」

「てかこの前ちらつと顔見えたけど、めちゃくちゃイケメンじゃなかった!?
ねー、中村さん。あんなかつこいひ彼氏どこで出会ったの?」

ずいっと近づいてくる同僚に、曖昧な笑みを返す。

（彼氏、か……）

気づけば、琉生くんは頻繁に会社まで迎えに来てくれるようになっていた。最初は駅まで送ってもらっただけだったのに、いつからか当たり前のように家まで送ってもらうのが日課になっていて——そして私も、いつの間にか「琉生くん」と、くん付けで呼ぶようになっていた。

だけど、彼氏かどうかと言われると、付き合つてほしいと言われたわけでもないし、どこかに遊びに行くわけでもない。曖昧な関係のまま、時間だけが過ぎていた。

高級車で会社まで迎えに来てくれる琉生くんの存在に、最初の何回かは「彼氏じゃない」と否定したつもりだった。けれど、今の私たちの関係をどう説明していいのかわからなくて、曖昧に返事をしているうちに、噂好きの同僚たち

の間ではすっかり「中村さんの彼氏」ということになってしまっていた。

（琉生くんを勝手に彼氏だつてことにしちゃって、申し訳ないな）

「……お先に失礼します」

「お疲れ様々！ 彼氏さんによろしくね！」

同僚たちは気にする様子もなく、笑いながら手を振ってくる。私はまた曖昧な笑みを返して、会社のドアを抜けた。

白く磨き上げられたポルシェが、いつもの場所に停まっているのが見える。

（あれ……）

近づいていくと、運転席の琉生くんが電話をしているのが見えた。眉根を寄せた厳しい横顔には、彼の背格好も相まって、思わず気圧されるような凄みが

あつた。

けれど私の姿を見つけると、琉生くんはすぐに電話を切った。運転席のドアが開き、わざわざ外に出てきてくれる。

さっきまでの剣呑な空気はどこかに消えて、穏やかに細められた目と、緩やかな弧を描く唇がそこにあつた。私がよく知る、いつもの琉生くんだった。

「日菜子ちゃん、お疲れ様」

「琉生くんも、お疲れ様。……あ、ありがとう」

助手席のドアを開けてくれた琉生くんにお礼を言う。

「いーえ、どうぞ」

促されるまま車に乗り込むと、いつもの香水の匂いがふわりと香った。煙草の匂いは、ほとんどしない。

「あの……、今日も電話してたよね？ 大丈夫だった？」

運転席に乗り込んだ琉生くんにおずおずと聞いてみる。

「ん？ ああ、平気平気。ちよつと仕事の確認だったただけだから」

「そつか。それなら、いいんだけど……」

（――仕事、か）

先ほどの同僚に『彼氏』と言われたことが、ふと頭をよぎる。

琉生くんは、私にはいつも優しい。だけど、私は彼の何を何も知らない。

どうしてあの歓楽街にいつもいるのか。私より少し年上なだけなのに、どうしてこんな高級車に乗っていて、いつも身につけているものも高そうで――どんな仕事をして、それを手に入れているのか。私は何一つ知らない。

本当は、聞けばいいだけなのだと思う。琉生くんは、聞かれて機嫌を損ねるような人ではない気がする。

（だけど、聞く勇気がない）

琉生くんが自分から話さないということは、きっと触れられたくないんじゃないか。もし聞いて、困らせてしまったら——そう考えると、喉元まで出かかった言葉はいつも引つ込んでしまう。

でも本当は、ただ怖いだけなのかもしれない。「彼氏」と呼ばれることにさえ、ちゃんと答えを出さないまま、ただ流されている自分。踏み込む勇気がないくせに、踏み込まれることだけを望んでいる自分。

（情けない、な）

「——日菜子ちゃん？」

声をかけられて我に返る。車は信号待ちで止まっていて、いつの間にか膝の上でぎゅっと握り締めていた右手を、琉生くんの大きな手がそっと包んでいた。

「あ……」

そのまま握り込んだ拳をやわらかくほどかれて、指と指の間に彼の太い指が絡められる。彼の手はあったかいのに、指にはめられた指輪の金属だけがひんやりとしていて、その感触だけがやけにはつきり伝わってくる。

「ご、ごめん。ちよつと考え事してて……」

「何かあった？」

「それは——」

低く穏やかな声が、優しく鼓膜に響く。

（わからない、わからないよ……）

私たちの距離はずつと遠いと思っていたのに、琉生くんはたまにこうして私に触れてくる。だけど、あのときラブホでしたような触れ合いじゃなくて、こうして手を繋いだりする、穏やかな触れ合いだ。

特定の彼女はいないと言っていたから、遊び相手くらいはいるんだろうと、勝

手に思っていた。私も、その中の一人に過ぎないんだろうと。

だけど、週の半分くらいはこうして仕事帰りに迎えに来てくれるし、性的なことを迫られたこともない。だからこそ、余計にわからなくなる。大切にされて
いるんじゃないか、そんな気にさえさせられる。

（まあ、私みたいな地味な女が、琉生くんの遊び相手なんて務まると思えな
いんだけど……）

「話したくないことは無理に話さなくていいよ」

「ッ……」

言い淀んでいると、彼は私を宥めるみたいに、親指の腹で私の手の甲をすり
すりと擦った。

（私より大きな、男の人の手——）

ほんの少しだけかさついた、節くれ立った無骨な手。この手が、あの雨の日、

私の身体の奥深くまで触れたんだと思うと、なんだか胸の奥がいまだに甘く疼く。

（なんだか、私の方が触れられたがってるみたい）

そんな自分に気づいて、思わず俯く。琉生くんは何もしゃべらない私に、ふつと微笑みかけた。

「なー、日菜子ちゃん。このあと時間ある？」

「え？ ……だ、大丈夫だけど」

最近琉生くんが迎えに来てくれるからなるべく早めに帰っているし、明日は休日です予定も特にない。

「じゃあ、俺と『いーこと』しよ？」

「……へ？」

このところ、日中はめっきり夏らしくなってきたけれど、夜になると驚くほど涼やかな風が吹く。

車を降りて、しばらく歩く。途中のコンビニで、琉生くんに誘われるまま耐ハイトと軽いおつまみを買った。そのまま歩いて、小さな公園にたどり着く。

穏やかな夜風が、私の頬を撫でていく。

（気持ちいい……）

昼間は暑いくらいだったのに、夜のこの時間はとても過ごしやすい。

私の靴のヒールがコツコツと鳴る。それに重なるように、琉生くんの腰につけたアクセサリーがじゃらじゃらと音を立てた。静かな夜道に、私たちの足音とコンビニ袋のかさかさという音だけが響いている。

「よし、このへんでいいか」

琉生くんは、街灯の明かりがぼんやりと届く、人気のないベンチの前で立ち止まった。繋いでいた手をぱつと離すと、勢いよく腰を下ろす。

「ほら、日菜子ちゃんもどうぞ」

コンビニの袋から缶チューハイを取り出し、カシュッと開ける。まだ立ち尽くしていた私に、琉生くんはそれを差し出してきた。

「ありがとう……」

まだ冷えている缶を受け取って、もう一人座れそうなくらいの隙間を空けて、琉生くんの隣にそつと腰を下ろす。

琉生くんも自分の分の缶を開けて、こちらに軽く缶を差し向けてきた。なんでもない仕草なのに、胸の奥がきゅつと縮こまる。

「乾杯！」

「……かん、ぱい」

缶同士を合わせてから、一口飲むと、アルコールとともに冷えた炭酸が喉の奥に滑り落ちていく。

（……外でお酒を飲むなんて、初めて）

夜の公園のベンチに座って、缶を片手に誰かと話す——そんな学生がやるようなことを、私はこれまでの人生で一度もしたことがない。

門限を破ったことも、羽目を外したこともないまま、私は大人になってしまった。そんな私が今、こんな時間に、男の人の隣でお酒を飲んでいる。

（……なんか、すごい解放感）

喉を伝っていくアルコールのじんわりとした熱と一緒に、身体の内からも、これまで知らなかった何かがじわりと込み上げてくる。ふわふわと、心が浮き立つような感覚。

ちらりと横を見ると、琉生くんは豪快に酎ハイを飲み干していた。喉仏が大

きく上下するのを見て、思わず目が離せなくなる。

(い、色っぽい……)

街灯に照らされた喉元、缶を傾ける仕草の一つひとつが、妙に様になっている。夜の雰囲気を纏った琉生くんには、こういう飲み方がよく似合うのだと、なんとなく納得してしまった。

「あー……！ やっぱ外で飲む酒は最高だな」

「ふふ、確かに。こんな風に外で飲むの、なんだか新鮮で楽しい」

琉生くんが視線を上へと移したので、私も釣られるように空を見上げる。都会ではあまり見えないはずなのに、今夜は思いのほか星が綺麗に見えた。小さな光の粒が、いくつもいくつも夜空に散らばっている。

「星、見えるんだね」

「意外と見えるもんだよな。俺、悩んだときとかはよくこうやって酒飲みなが

ら星見るんだよ」

「そうなんだ。……なんか、意外かも」

「だよなー。俺も柄じゃねーって思うし」

そう言つて琉生くんはからつと笑つた。

（……琉生くんといると、なんか楽だな）

話しているうちに、私の悩みもだんだんと萎んでいつてしまう。夜風に吹かれながら、お酒を飲んで、二人で同じ星を見上げる。それだけのことが、心地よい。

ちらりと横を伺うと、あまりお酒が強くない私がちびちびと缶を傾けている間にも、琉生くんはもう二本目に手をつけていた。ふと視線を感じて顔を上げると、横目でこちらを見る琉生くんと目が合う。切れ長の目元が、柔らかに細められた。

「……日菜子ちゃんといると楽しいわ」

（……あ）

胸が、ぎゅつと掴まれたような気がする。

——私という、楽しい。

（琉生くんが、私という、楽しいと思ってくれている）

その言葉が、じんわり、じんわりと胸の奥に染みていく。顔が、熱い。

さつきまではそんなことなかったのに、急に酔いが回ってきたようだった。

「日菜子ちゃん、顔赤い」

「あ……」

私が空けたはずの一人分のスペースを、易々と詰められる。

琉生くんが、熱くなった私の頬に触れた。琉生くんの大きな手も、私の頬くらい、いや、それ以上に熱い。

頬を滑り落ちた手が顎に添えられて、琉生くんの方を向かされる。吸い込まれそうなブラウンの瞳が熱っぽく潤んで、じいっと私を見つめていた。

その瞳に吸い込まれてしまうのが怖くて、思わず目を閉じた。

「ん……」

唇に、熱い吐息が触れて、柔らかな感触に包まれる。

（キス、されてる。琉生くんの唇、熱くて気持ちいい……）

「日菜子ちゃん」

触れるだけの、長い、長いキス。

唇が離れては、また別の角度で口付けられる。

うるさく鳴る心臓の音が、触れ合った唇から琉生くんにまで伝わってしまいそうで怖い。

いつの間にか、息をすることさえ忘れていたらしい。ふ、と我に返った瞬間、

頭がくらくらして視界が滲む。アルコールのせいなのか、それとも——このキスのせいなのか、自分でもわからなくなってくる。

「は、あ……ッ」

ようやく唇が離れたときには、すっかり息が乱れてしまっていた。とろんとした目のまま、目の前の琉生くんを見つめる。

（——あ）

動けなくなつた。

熱を孕んで濁つた、欲を隠さない瞳に射すくめられて、喉がひゅつと鳴る。

「……酒、飲みすぎただろ？」

低く掠れた声が、耳のすぐ近くで囁かれる。吐息が耳朶をかすめて、ぞくりと肩が震えた。

ただ見つめ合つたまま、私の頬に触れる指先の熱だけが、その場の時間を静

かに止めていた。

「——休憩できる場所、行こっか」

「ッ……」

恋愛経験が少ない私だって、それがただの建前だってわかってしまう。

だけど私は、その言葉に縋るようにして頷いていた。

本当は、自分でも気づいていたのかもしれない。琉生くんに求められることを、心のどこかでずつと望んでいたことに。

だから、そんな言い訳に飛びつくようにして、私は琉生くんの手を引かれるまま、歩き出していた。

「んッ♡ ちゅ……ッ、ちゅく……ッ♡ んむッ♡ ……は、あッ♡」

背中が、ふかふかのシーツに沈む。生活感のない、ホテル特有のひんやりとした清潔な匂いのシーツの上、琉生くんに覆い被さられながら、ベッドと彼の間に閉じ込められる。

（琉生くんの舌……、あつつい♡ このまま全部溶かされちゃいそう……♡）

「は、あ……ッ。日菜子ちゃん……。ほら、舌出して？」

「あ……♡」

彼のほんの少し上擦った低い声に、恥ずかしさなんて忘れて、舌をべえ♡と出す。

「……んん♡」

「ぢゅる……♡ ぢゅう♡ は、あ……。べろもちっちゃくて、かわいい♡」

「んむう♡ ん、ん……♡」

舌をぢゅうッ♡ と強く吸われると、頭の芯までびりびりと痺れて、下腹部の奥がきゅん♡ と甘く戦慄く。

琉生くんの手がするりと私のブラウスの中に入り込む。背中に腕を回されて、気づいたときにはもう、ブラジャーのホックがパチンと外されていた。

「……あッ♡」

琉生くんの腕が、私のブラウスごとブラジャーを一気にたくし上げた。

彼の眼前に無防備に曝け出されたおっぱいがぷるん♡ と揺れる。支えを失ったそこを掬い上げるようにして、彼の大きな熱い手のひらが、私の柔らかい胸を優しく揉みしだいていった。

「柔らかー……。日菜子ちゃんのおっぱい、ずっと触ってたくなるな」

「んッ♡ ……んうッ♡ る、いくん、何言って……！ ……あッ♡」

胸を隠そうと伸ばした手は、すぐに琉生くんの熱い手に絡め取られて、シー

ッに縫い止められてしまう。

「あ……ッ♡ やだ、あッ♡ そ、そんな見ないで……ッ♡」

吐息のかかる距離で、じつとりとした視線を注がれている。恥ずかしくてたまらないはずなのに、見つめられているそこから甘い疼きがじわり♡ と広がっていく。

「もつと見せてよ。こんな綺麗なんだからさ。……それに、この可愛いピンク色の乳首は、期待してるみたいだけど？ ……ふうッ♡」

「ひうッ♡」

ぷっくり♡ と勃起上がった先端に、熱い吐息を吹きかけられて、反射的に腰がびくついてしまう。

（あ♡ やだ、やだ♡ 恥ずかしいのに♡ 見ないでほしいのに……♡ 息吹きかけられただけで、おっぱいがじんッ♡ じんッ♡ って疼いちゃってる♡）

——れろッ♡

「ああ……ッ!?!♡」

疼いていた頂を、琉生くんの熱い舌が下から舐め上げていった。すぐに唇は離れていつてしまったけど、熱く湿った生々しい感触の余韻だけが残って、胸をじいんッ♡と痺れさせる。

「いー反応♡ 可愛いね、日菜子ちゃん」

「……やッ♡ やあッ♡」

「そんなこと言っただって、すごい気持ちよさそうにしてる。もっとその声聞きたい」

「あッ!?!♡」

れろッ♡ れろれろッ♡ れろろろ……ッ♡

「ん……ッ♡ あ、ああろろ……ッ♡ んうッ♡ あ♡ そ、れえッ♡」

何度も何度も下から舐め上げられて、時折乳尖った先端をピンッ♡と舌先で弾かれる。そのたびに甘い痺れが下腹部へと伝わって、腰がひとりでにビク♡ ビク♡ と跳ねてしまう。

「あー……、可愛すぎる。胸だけでこんなに気持ちよくなっちゃってさあ」

——ぢゅううううッ♡ ぢゆるッ♡ ぢゅうッ♡

「んんッ!?♡ あッ♡ すつ、吸っちゃ、やあ……ッ♡ あ♡ ああッ♡」

乳首が琉生くんの熱い口内に包まれて、そのまま吸い上げられる。その突起を口に含んだまま、熱い舌でピンッ♡ ピンッ♡ って弾かれたり、時折ざりッ♡ と根本に甘く歯を立てられたり。そんな不規則で甘い刺激に、下腹がぎゅうッ♡ と切なく戦慄いた。

触られてるのは胸だけのはずなのに、下腹部へ甘い痺れが伝わり続けて、おまんこからはとろッ♡ とろッ♡ としきりに蜜が溢れ出してしまっている。

「前触ったときよりも反応いいね。酔って感度上がってる？」

「ッ……♡　そ、そうかも……♡」

どうか、そういうことにしておいて欲しい。

（だってそんなの……♡　ずっと触れられたがってみたいで、恥ずかしい……♡）

——カリッ♡

「あッ♡」

だけど、私の身体はどこまでも正直だった。彼が反対側の先端を爪先でカリッ♡と軽く弾いただけで、ビクンッ♡とおおげさなほどに腰が跳ねてしまう。

カリカリッ♡　カリカリカリッ♡

ぢゅうううッ♡　ぢゅるッ♡　ぢゅるるッ♡

「あう、うゝゝ……ッ!!♡ んうッ♡ や、あゝゝ……ッ♡」

（あ♡ カリカリしながら反対側吸うのため♡ 頭ふわってなって、お腹ぎゅううッ♡ つてなる♡ クる♡ なんかくるッ♡）

腰をガクガク♡ と震わせながら琉生くんの方へ視線を向けると、私の胸を吸いながら、上目遣いの彼と目が合った。いたずらっぽく細められた熱い瞳が、言葉を交わさずとも「イツて♡」と目線だけで促してくる。

少しでも快感を逃そうと、はっはっ♡ とワンちゃんみたいな短い呼吸を繰り返す。だけどそれ以上に気持ちいい波がたくさん襲ってきて、快感がお腹の底にどんどん溜まっていく。

快感で歪む私の顔を、琉生くんの綺麗な瞳が、真っ直ぐ見つめ続けていた。

（やだ♡ やだ♡ イキ顔見られるッ♡ だけど、も……ッ♡ 我慢できな……ッ♡）

「んんッ!!♡ んゝゝ……ッ♡ —————ッ♡♡」

シーツをぎゅううッ♡ と握り締めながら、腰を大きくビクンッ♡ ビクンッ♡ と震わせる。

頭が真っ白になって、荒い呼吸を繰り返す私の手を、琉生くんが優しく解く。そして、指先を絡めるようにして、自分の大きな手でぎゅっと包み込んでくれた。

（あゝ……♡ イッチやった♡ 私、胸だけで……ッ♡ どうして、こんな……♡）

「胸だけでイッチやったな？ とろんってした顔、かわいいー♡」

「や、あ……♡」

琉生くんは私の唇に触れるだけのキスを落とすと、上体を起こして私のスカートに手をかけた。

「……っ、すっげえ♡ 下着ぐちよぐちよじゃん」

「ごッ、ごめん……♡ こんな……♡」

「なんで？ 感じてくれてたんだなーってめっちゃくちゃ嬉しいけど」

「う……♡」

彼に脱がせられながらちらりと見えてしまった自分の下着は、すっかり愛液を吸って色が変わってしまっていた。改めて自分がどれだけ感じているのか突きつけられたようで、消えてしまいたくなる。

ふいと目を逸らしている間に、衣擦れの音だけが耳に届く。琉生くんも、もう服を脱ぎ始めているらしい。

「あ……♡」

胸元でゴールドのネックレスが派手に揺れていた。厚みのある胸板から、綺麗に割れた腹筋へと、視線が勝手に吸い寄せられていく。

服を着ていても体格はいいなと思っていたけれど、実際にこうして裸を見てしまうと、想像以上で、つい目が離せなくなる。

（す、すごい……♡ 目のやり場に困る……♡）

私が彼の肉体に目を奪われている間にも、彼はベルトを外すと、そのままズボンを脱ぎ捨てた。

「……ッ!?♡」

綺麗な顔の琉生くんにはとても似合わない、あまりにもグロテスクなソレ。いや、琉生くんの恵まれた体格を考えたら、それは見合つてると言えるのかもしれないけれど。まるでそれ自体が一つの生き物かのように、ドクッ♡ ドクッ♡ と強く脈打っている。

男性経験の大して多くない私でも、それが規格外に大きいことを本能的に理解してしまった。

（こんなの、挿入らない……♡）

そう思ってしまったてから、はたと気づく。

「……ッ」

（私、琉生くんと、えっちしようとしてるの……？）

ここまで着いてきておいて、今さらかもしれない。だけど、本当にこのまま、酔った勢いで流されてしまつていいのだろうか。

「——日菜子ちゃん」

思考に沈みかけていた私の顔を、琉生くんがそつと覗き込んでくる。

「そんな不安そうな顔しないで」

頬を撫でる指先が、ひどく優しい。

「安心してよ。日菜子ちゃんが挿れてつて言うまでは挿れねえよ？♡」